

おもろさうしの

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることができます。

植物

其の巻

「くひし・いくさ」

(トウツルモドキ)

(イ)

一 聞ゑたうやまに

名高い当山に

大君ぎや 気 やりよわ

大君(神女)の霊力をやり給え

又 鳴響むたうやまに

鳴り響く当山に

又 せるましの くひしに

せるまし(地名)の藤づるもどきに

又 島尻の いくさに

島尻の蘭草に

「第一巻十二」

「解説」

名高い当山(旧玉城村字当山)に、大君の霊力をやり給え。鳴り響くほど名高い当山に、大君の霊力をやり給え。せるまし(地名)の藤づるもどきに、大君の霊力をやり給え。島尻の蘭草に、大君の霊力をやり給え。「せるまし」は地名。旧具志頭村破名城の古名か。「くひし」は植物名。トウツルモドキのこと。久高島ではクイジという。ノロが神事の時にかぶる冠につかう。

古くはシキヨといったが、後にクイジというようになった。クイジを冠にして頭にかぶることで神女はすでに神に成り変わっている。

「いくさ」は、植物名。イグサ(蘭草)。茎は細長く1メートル近くになる。たまたおもて、花むしろ、ござなどを編む。

島尻の旧玉城村字当山に、「気(霊力)」を遣わし給え、「気」が満ちたら村の「くひし」「いくさ」も霊力豊かな神木になることであろう、と祈っているオモロ。



一口メモ

山地や海岸の陽当たり良好な林縁に生える長さ10m以上にも達する大型のつる性植物。徳之島を北限とし、沖縄地域、台湾、中国、東南アジア、ポリネシア地域に分布する。材質が強靱で弾力があることから、太い種は馬鞍に用いられ、茎は裂いて蓆などの編物に使用された。

おもろ名 いくさ
和名名 イグサ科
科名 ビーク・オートウージン
方言名

一口メモ

日本で栽培が普及したのは、江戸時代以降といわれている。沖縄県では、大宜味村・旧世名城村・伊平屋村・伊是名村等で栽培されている。葉・茎・根は、解熱、むくみ、肩凝等の薬用としても利用され、香りにはリラックス効果・抗菌性があるとされる。



※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

美らなる島の輝きを御万人へ

当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

沖縄美ら島財団

<http://churashima.okinawa/>

美ら島研究センター

<http://churashima.okinawa/ocrc/>

沖縄美ら島財団 Facebook

<https://www.facebook.com/okinawa.churashima>

海洋博公園

<http://oki-park.jp/kaiyohaku/>

首里城公園

<http://oki-park.jp/shurijo/>

沖縄美ら海水族館

<http://oki-churaumi.jp/>

沖縄県立名護青少年の家

<http://www.opnyc.jp/>

2015年7月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

季刊誌 南ぬ風 夏号 vol.36
2015. 7~9

企画・編集・発行



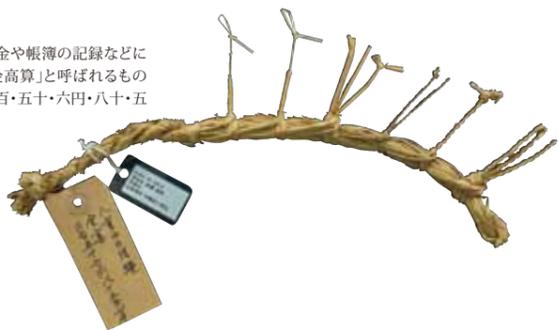
一般財団法人
沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷 〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

ISSN 2189-4140

写真は八重山の藁算。借金や帳簿の記録などに使われたと考えられる「金高算」と呼ばれるもので、右側の結び目から「三百・五十・六円・八十・五銭・六厘」を表している。



「小学生向けにはどんな話を？」
子どもたちは生き物が好きですからね、昆虫や動物の話をする喜びますよ。それから、本物を見せること。風樹館に来るこどもたち

風樹館では生き物の展示だけでなく、沖縄の伝統工芸や民具など文化関連の展示も多いですね。
沖縄には自然も文化も、特有のすばらしいものがある。ただ、沖縄の人にとっては身近すぎて、その貴重さに気づかないこともありま



風樹館内の藁算展示コーナー。さまざまな地域・用途のものがあり、他の資料館と比較しても見ごたえがある

「今も使われているんですか？」
いわゆる氏子算というもので、祭祀の時に「氏子は何人ですよ」と神様に報告するために、お供えします。風樹館の出張授業では、学生が講師役になって藁算を教えるこ

庶民の暮らしの知恵ですね。
明治以降、学校教育の普及で識字率が高くなると、廃れていきました。今や絶滅の危機にあつて、きちんと意味をなした藁算が現役で残っているのは、沖縄県内でもわずか数カ所なんですよ。

「生物だけでなく文化も研究されて、すばらしいですね。」
僕は沖縄へ来て35年になります。が、本当はこういう文化的な研究は、沖縄の人にもっとやってほしいと思っています。だからこそ、子どもたちに沖縄の文化や自然の素晴らしさを教えるんです。小さい時から地道に積み上げたものがあるれば、県外から来たにわか仕込みの研究者にも負けません。地元の方の中には、沖縄は東京に比べて遅れているように思う方がいるかもしれませんが、とんでもない！特に若い世代にはもっと自信と誇りを持ってほしい。自然も文化も、こんなに素晴らしいものがあるんだから。

ともあるんですよ。風樹館で藁算を学んだ学生は、ちゃんと藁算が作れますから。沖縄美ら島財団の助成事業を活用して、大阪の国立民族学博物館に所蔵されている藁算の調査もしました。5年かけて約260点を調査して、その結果は2015年2月に美ら島研究センターで発表しました。

沖縄には、文化も自然も、特有のすばらしいものがある。



琉球大学博物館(風樹館)学芸員 佐々木健志

SASAKI TAKESHI

文：いのうえちず

1987(昭和62)年、琉球大学大学院農学研究所修了。財団法人海洋博覧会記念公園管理財団(当時の職員として1990(平成2)年の海洋博覧会公園の熱帯・亜熱帯都市緑化植物園のオープンに携わる。1994(平成6)年より現職。専門であるクモをはじめ、さまざまな琉球列島の生物を研究する一方、出張授業を数多く実施。2010年沖縄生物学会池原貞夫記念賞第1回受賞者。



貴重な資料や標本を17万点あまり収蔵する大学付属博物館
風樹館は、1967(昭和42)年に大学付属の資料館として設置。全国的に見ても早い時期にオープンした、歴史ある博物館だ。学内外の研究者が主に琉球列島で収集した17万点以上の標本や資料が収蔵されている。イリオモテヤマネコやヤンバルテナガコガネなど希少生物の標本をはじめ、沖縄の伝統工芸品から考古学資料まで多彩。佐々木学芸員に話を聞いた。

contents

美ら島をつなぐ人	02	沖縄の大木	09
おきなわ歳時記	04	運営管理	10
水族館で出会える生き物	05	スポットライトの向こう側	12
沖縄の希少植物	05	財団いんふお	14
調査研究	06	編集後記	15
普及啓発	08	おもろさうしの植物	裏表紙
御城物語	09		

作品タイトル「サガリバナ」
夜から咲き始め、朝には全て木から落ちてしまうという一夜限りの儚い花。その美しい花に集まる生き物たちの姿と静寂な沖縄の夜を融合。



表紙イラストについて
与儀 勝之 Masayuki Yogi
琉球イラストレーション作家 那覇市生まれ。
誌名「南ぬ風(ふえーぬかじ)」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことで。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思ひます。



旧暦5月4日、ユッカヌヒーは戦前まで琉球・沖縄の子どもたちにとって待ち遠しい、特別な一日だった。琉球には古くから5月4日のユッカヌヒーは、子どもがオモチャを買ってもらえる日という習慣があったためだ。

那覇ではメインストリートだった大門前（現在の那覇市東町）に臨時の玩具市が数日にわたって立ち、爬龍船競漕（戦前まで、那覇ハーリーは那覇港から豊見城にかけての漫湖（まんこ）で開催）。琉球王朝時代の主力商品は張り子の琉球玩具、近代以降は本土産のオモチャが入ってきた。また、昭和初期からは世相を反映し、男の子向けにはゼンマイ式の「機関銃」や「潜水艦」、火薬を仕込んだロール紙を使ったピストル風の「百連発」、日本刀を模した「タチゲワー」などが人気で、チャンバラごっこや戦争ごっこなどが盛んだったという。

かつては瓦のカケラや石ころなど、身の回りのものを何でもオモチャにして遊び、またアダンの葉や木の実など身近な素材を使ってオモチャを自作していた子どもたち。そんな慎ましい暮らしの中で、年に一度のユッカヌヒーは、親の懐具合を探りながら現実的な夢を見るという側

ユッカヌヒー



写真上下/制作者：沖縄美ら島財団 参与 西平 守孝

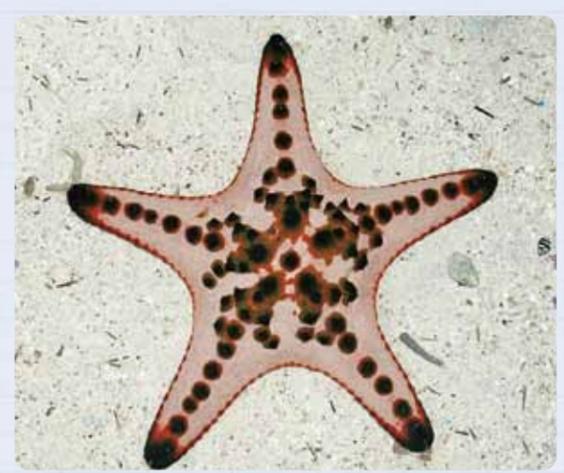
面はあったとしても、楽しみな日だったに違いない。

現在ではすっかり歴史的用語になりつつあるユッカヌヒー。その面影は、沖縄県内各地のハーリー会場の出店するオモチャの屋台に残る程度だろうか。

ちなみに、那覇市内では毎年旧暦の5月4日前後に、張り子や絵画、陶器などの現代作家たちによる、ユッカヌヒーをテーマにした「ユッカヌヒーアート展」が開催されており、こちらはユッカヌヒーを知らない20〜30代の若い大人に人気のイベントとなっている。

参考文献：那覇市史「那覇の民俗」資料編第二巻中の「那覇市企画部市史編集室『なはわらへ行状記』船越義彰・著/沖縄タイムス社・版

沖縄 美ら海水族館で 出会える生き物 Vol.4



和名：コブヒトデ
科名：コブヒトデ科
学名：*Protoreaster nodosus*

奄美大島以南の浅いサンゴ礁域に生息する、直径約30cmの大型のヒトデです。

表面にはコブ状の突起が整然と並び、これが名前の由来になっています。体の色は、個体によって緑や赤、灰色など様々です。体の中には骨片と呼ばれる細かい骨があり、骨片の1つ1つは網目状や覆瓦状の組織で結合されています。

普段コブヒトデを触ると硬い感触ですが、波などの影響で裏返しになってしまった時には、この骨片の結合を柔軟にすることで、二つ折りにりながら自分で元に戻ることができます。まるで置物のようにも見えるヒトデ達が、生きていることを実感できる1シーンでもあります。沖縄美ら海水族館では「イノーの生き物たち」コーナーで展示しています。

(村田 香)

沖縄の希少植物 Vol.22



和名：タイワンツクバネウツギ
科名：スイカズラ科
学名：*Abelia chinensis var. ionandra*

レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧IA類（沖縄県）、絶滅危惧IA類（環境省）

山地の岩場に生える小さな常緑樹で、春にラッパのような白い可憐な花を咲かせます。5枚のうす緑色をしたがく片が花後も長く残り、これが羽根突きで使う羽根に形が似ていることから「突く羽」と名付けられました。

日本では沖縄島、石垣島、奄美大島の限られた場所で見つからないとても希少な植物です。もともと数が少ない上、園芸目的の採集が拍車をかけ、現在はほとんど野生の姿を見ることができません。

本種と近縁の交配種であるアベリア（ハナツクバネウツギ）は、開花期が長く丈夫で刈込にも強いことから、生け垣などに使われています。沖縄ではあまり見かけませんが、世界中で利用されている優れた緑化植物です。

(佐藤 裕之)

海洋博公園に生息するヤシガニの調査

ヤシガニはインドー太平洋の熱帯域から亜熱帯域に生息する陸棲最大の甲殻類で、食用による乱獲や生息域の消失などで世界的に資源が減少しています。日本でも八重山や先島地方では食用として利用されていますが、生息数は多いとはいえず、環境省や沖縄県のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）とされています。また、近年では宮古島や多良間島では乱獲を防ぐための保護条例が定められています。しかし、ヤシガニの生活史や成長、繁殖生態に関する基礎的な情報は十分とはいえず、資源評価や保護対策を行うためにはさらなる生態研究が欠かせません。

海洋博公園の敷地内では、かねてより頻りにヤシガニが確認されていたため、相当数が生息していると考えられました。このようなまとまった生息は沖縄本島では報告がなく、分布のほぼ北限に残された貴重な個体群であるとも言えます。私どもの研究チームは、北限域という生存に厳しい状況下での生息実態を把握することにより、ヤシガニの生息に重要な環境条件

が顕在化できると考え、平成18年度から現地調査を展開しています。ここでは、これまでの調査結果の概要について紹介します。

ヤシガニは沿岸に発達する自然度の高い海岸樹林に集中して生息しています。この樹林は、少なくとも開園以降大規模な開発が行われておらず、餌となるアダン等の結実樹が豊富です。また、海洋博公園のヤシガニは冬場にはほとんど活動せず、気温と湿度が安定した石灰岩質の洞穴内で越冬します。そして洞穴は沿岸樹林内に多いことも分かりました。このように、すみかと餌場、越冬場所が自然に近い状態で維持されてきたことが、公園内のヤシガニの個体群の存在に大きく関与していると考えています。また生物の採集や活動時間である夜間の立ち入りが制限されており、人為的な影響がほぼ排除されてきた状況も、個体群の存続にプラスに働いていると考えられます。

また、調査では繁殖生態についても情報を得ることができました。雌ヤシガニは腹部に大量の卵を抱いて保護し、その後海岸で幼



海洋博公園内で確認されたヤシガニ。



腹部に卵を抱いた雌ヤシガニ。約2週間卵を守った後、幼生を海に解き放つ。



「海洋博公園ナイトツアー」の様子。発見したヤシガニについては解説を交えながら調査と同様にデータを取得する。再捕個体が見つかった場合は捕獲履歴などの情報を希望者に配信している。

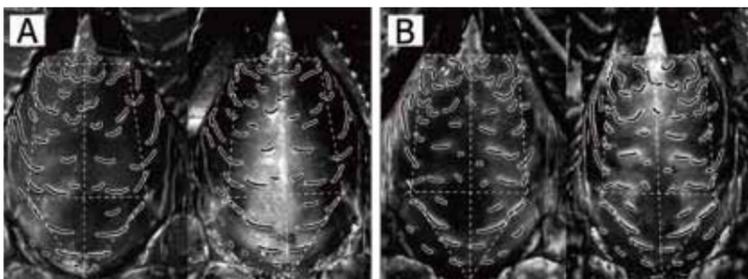
生を放ちますが、実際にこの様子も確認され、北限域にある当個体群も繁殖していることが確認されました。しかし、繁殖期は南方での既往調査と比べるとともとも短い7〜8月の約2ヶ月（南方では、4ヶ月以上）と推定されました。

さらに、野外調査や飼育実験を通じて、ヤシガニの甲殻の紋様パターンは脱皮後も変化なく、これにより個体識別が可能であることが明らかになりました。そこで、野外調査で発見したヤシガニについて、8年間で約500枚の甲殻紋様の写真を撮影しました。そしてこれらの写真をひとつひとつ照合して得られた約130の再捕例について、体の大きさの変化や再捕までの期間などから成長解析を行いました。その結果、ヤシガニの成長は非常に遅く、一般的に食用とされる大きさである胸長約40mm（体重約500g）に達するまでに雄は約11年、雌は約25年を要することが分かりました。また、雄の成長は雌よりも早く、最大胸長は雄で約80mm、雌で約50mmであり、その寿命は雌雄ともおよそ50年と推定されました。また、これらの成長速度や体の大きさは、北限という厳

しい気候条件であるにもかかわらず、過去の熱帯地方等の研究事例と比べても遜色ない水準にありました。つまり、海洋博公園にはヤシガニの生息に適した環境条件が整っていると考えられます。ヤシガニは長寿命で成長が遅いため、一度個体数が減少すると元の個体数に戻るのに長い年月を要することが想定されます。それゆえ科学的な情報に基づいた適切な保全策を講じる必要があるでしょう。

美ら島研究センターでは、調査研究事業で得られたこのような情報を、科学論文としてだけでなく、講演会などを通して一般の方々へ積極的に発信しています。また、海洋博公園において平成27年度から開催している「海洋博公園ナイトツアー」でもヤシガニを始めとする夜行性の生物の紹介を行っています。海洋博公園は多くの人が訪れる場所ですので、そこに生息するリアルなヤシガニの生態情報の発信を通し、世界的に減少が進んでいるヤシガニに対する保全意識の普及に貢献していきたいと考えています。

（岡慎一郎）



再捕前後のヤシガニの甲殻紋様。撮影角度により若干異なっているようにも見えるが、それぞれの配置は完全に一致する。
A: 左-胸長44.3mmの雄、右-約6年後に再捕の同じ個体(胸長60.3mm)
B: 左-胸長39.6mmの雌、右-約6年後に再捕の同じ個体(胸長42.2mm)。



調査状況。夜に園内を歩き回ってヤシガニを探す。

沖縄の身近な環境を次世代へ



平成26年度、美ら島研究センターでは新たな事業として「やんばる環境学習」を開始しました。本事業は、沖縄の身近な環境に生息する生き物を題材として学習活動を行うことで、児童生徒の地域環境に対する興味関心の向上を図ることを目的としており、大きく短期学習プログラムと通年学習プログラムにわけられます。

短期学習プログラムは、授業の一環として取り入れやすいよう1〜2回での完結型とし、各回の所要時間は45分を基本としています。題材には、沖縄の身近な環境に生息する「ウミガメ」「サンゴ」「イノリの生き物」等を取り上げています。

2014年の実施例として、本部町内の小学3〜6年生を対象に「ホシズナ」を題材とした実験教室を行いました。ホシズナは、浅瀬に生息する有孔虫という単細胞生物の仲間です。死ぬと殻が残ります（これが「星の砂」と呼ばれています）。実験教室では、ホシズナの生態について解説を行なった後、顕微鏡を用いての形態観察や、殻を溶かして中の細胞を観察



する等の活動を行いました。参加した児童たちは、ただの砂だと思っていたものが生き物の死骸であったことに驚き、熱心に観察を行っていました。

また、宜野座村内の小学1〜4年生を対象に「海岸の生き物」や「イノリの危険生物」の講演を行いました。砂浜に残る生き物のあし跡や巣穴等を題材に、海岸で観察できる生き物を紹介した他、イノリの危険生物と対処法について解説しました。実施後、自由研究のヒントにもなる内容であったと、先生方からも好評価をいただきました。この他、通年学習プログラムでは「川の生き物」や「ウミガメ」を題材に、年間4〜8回にわたる学習活動を実施しています。

今後は、身近な生き物を題材にした学習活動の入り口として、教科単元に取り入れていただけるよう、事業内容の充実を図ります。

美ら島研究センターのホームページでは、過去の学習活動の様子や学習プログラムの紹介を行っています。是非、一度ご覧ください。

(前田好美)



①海岸の生き物観察 ②有孔虫の実験教室 ③死んで殻だけになった有孔虫(ホシズナ) ④生きている状態の有孔虫(ホシズナ)

うぐしくものがたり Vol.9 御城物語

かつて、首里の人々が「御城(うぐしく)」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関するトリビアを語る歴史エッセイ。

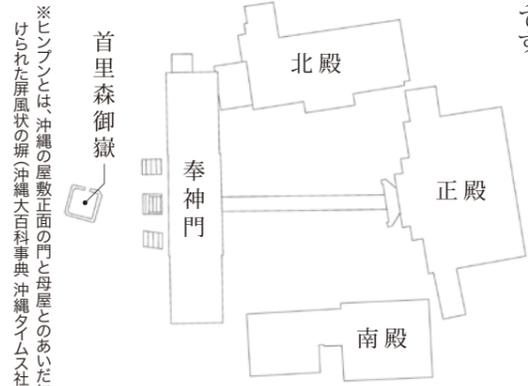


浮道のなぞ

首里城正殿の御庭中央に延びている赤いタイル状の瓦が並べられた道を「浮道」といいます。琉球王国時代は15センチ程度高く浮いた様に作られた道であったため、浮道といいました。現在は、5センチ程の高さで再現されています。

この浮道は、国王や中国皇帝の使者である冊封使など選ばれた人しか歩けない特別な道でした。

不思議なことにはこの浮道は、正殿に向かって右側に少しゆがんで斜めになっています。その理由には様々な説が述べられていますが、浮道が延びている方向に謎を解く力があるようです。



(幸喜淳)

大木

沖縄の大木



Vol.28
 <和名>
 リュウキュウハリギリ
 <科名>
 ウコギ科
 (学名: *Kalapanax septemlobus* var. *lutchuensis*)

沖縄本島北部「やんばる」を訪れたことがある人ならば「道の駅ゆいゆい国頭」へと立ち寄ったことのある人は多いのではないのでしょうか。そこから車でわずか数分のところに、この大木はあります。

国頭村奥間の集落内、奥間小学校の裏手斜面にある急な階段を上りきったところに威厳あるたたずまいを見せてくれる木が現れます。沖縄の名木百選に選ばれている「奥間土帝君の大木」(リュウキュウハリギリ)です。リュウキュウハリギリは、南九州以南、沖縄島などで見られるウコギ科の落葉高木で、日本本土などに分布するハリギリの変種とされておりハリギリよりも葉に毛が少ないことなどで区別されています。沖縄では「ダラギ」と呼ばれており、新芽は食べることができます。この大木は、樹齢約150年、高さ約14m、幹回り2.9mで、同種のものとしては最大級であると推察されます。樹皮はひび割れており、そこにガジュマルやヤエヤマオオタニワタリなどが生え、さらには地衣類に覆われた様は、この地で過ごしてきた歴史を感じさせてくれます。

奥間集落では、この木をご神木的存在として大切にしてきたそうです。土帝君へと登る階段や木の周辺などは集落の方々の手によって定期的に草刈等の作業が行われているそうです。水平に枝分かたれており倒伏する危険もあったようで、現在は倒伏するのを防ぐため重くなった枝を支える支柱が設置されています。また、現在でも旧暦2月2日に土帝君祭が催され、この大木の下に人々が集まって催事が執り行われているそうです。集落の歴史を見守ってきたこの貴重な大木は、未来へと引き継ぐために地元の人々の手によって大切に守られています。

(天野 正晴)

楽しいイベントで 家族の思い出づくりを 応援します！



完成した水鉄砲で狙い撃ち！中にはびしょ濡れになって遊ぶ子も

2015年のGWも、 楽しくゆっくり遊べるように

沖縄の観光シーズンの幕開けを告げるゴールデンウィーク。海洋博公園にも毎年多くのファミリー層が県内外から来園する。毎年、GWは来園者の園内滞在時間が長い傾向があるため、期間中は公園全体でさまざまなイベントを準備。幅広い年齢層の方にゆったり遊んでもらえるよう、沖縄美ら島財団のイベント担当では、イベント企画にも工夫を重ねている。

「今年は竹の水鉄砲を作るプログラムを初めて導入しました。工作体験は職員のアイデアで毎年内容を变えているんですよ」と語るのは企画運営管理チーム イベント担当の與儀史主任。無料で参加できるということもあって、フタをあけてみると「竹の水鉄砲」は大盛況。材料の竹が間に合わず、急いで補充するという一幕もあった。親や祖父母にとっては懐かしい遊びも、今の子どもには新鮮だったようだ。

昨年、好評で長蛇の列を作ったジェルキャンドルのコーナーは、今年はスタッフの人数を増やし、より短時間で完成する内容に変更

して、より多くのお客さまをお待たせせずに参加してもらえようにした。同じくイベント担当の神元聖子さんは言う。

「迷路も最初の頃は明るい部屋だったんですが、昨年は以前プラネタリウムがあった多目的室を活用して、わざと暗くした中で照明にブラックライトを使用した『星空迷路』にしました。好評でしたが、星の輝きが今ひとつだったので、今年は、ブラックライトを2倍に増量して、星が輝きを増しています。その結果、何回もくり返して回る子が続出して、担当者としてはうれしい悲鳴です」

イベント開催ごとにアンケートを実施して利用者の声を元に内容のバージョンアップをしているイベント担当。海洋博公園では無料または材料費のみで参加できるイベントも多いためファミリー層が参加しやすく、満足度は高い。だが課題がないわけではない。

「想定以上に多くのお客さまが来られて座席が足りなくなったりか、実際にやってみないとわからない部分もあります。反省点があれば、次回以降にそれを活かしています。好評なイベントでも、リピーターにも新しい発見や喜びがあるように工夫しています。季節に合わせた内容にしたり、新しいものを取り入れることは常に意識しています」

とは神元さん。春休み、GW、アニソンの日、サマーフェスティバル、夏休み、オータムフェスティバル、ゆうもどろ、グルメコンクール、正月、トリムマラソン、花まつり等々、年間を通してさまざまなイベントを開催している海洋博公園。特にGWのイベントは、広い園内を回り、展示に興味を持ってもらうことを目的としている。オリエンテーリング型プログラム

『キジムナーを探せ！GWスペシャル』では、今年はキーワードを探しておきなわ郷土村内を歩き、おもしろ植物園の植物も学習するという内容に改訂した。前述の與儀主任はこう語る。

「北部地域に貢献することも重要だと常に考えています。グルメコンクールは北部地域の飲食店さんが多数参加してくれて大盛況でした。GWのイベントでは今年で29回目となったマーチング・バンドフェスティバルには、北部地域の学校を中心に参加してくれています。来年は30回の記念大会ですし、何かやりたいですね」

文：いのうえちず



①郷土村の「竹の水鉄砲」特設テントの中は満席状態 ②イベント担当の與儀主任
③家族みんなで水鉄砲をつくる。お父さんも大活躍 ④北部地域を中心に県内の小・中・高・大学・一般の各団体がマーチングやバンド演奏を披露 ⑤好きな海の生き物を入れて、上手にジェルキャンドルができるかな ⑥ジェルキャンドルの完成見本
⑦星空迷路。お母さんと一緒に回る怖がり屋さんもチラホラ ⑧キジムナーの隠したキーワードを探せ！⑨植物の名前を探して…次はどこへ行く？ ⑩キジムナーのイラストまで手がける神元さん



環太平洋の島々に伝わる、さまざまな文化を紹介している海洋文化館。2013(平成25)年には展示内容を全面的にリニューアル。その際、ミクロネシアの島々を中心とした音楽系の展示を中心に、メインスクリーンで流れるオリジナルムービーのテーマ曲にも尽力されたのが、沖縄県立芸術大学の小西潤子教授である。今回はリニューアルに関する専門分野のお話や、知られざるエピソードをお聞きした。



沖縄県立芸術大学
音楽学部教授

小西 潤子 こにし じゅんこ

—ご専門はオセアニア音楽？

小西「はい。オセアニアでは、音楽が非常に重要な役割を担っています。これは沖縄も同じですよ。一般的に博物館に音楽の専門家が入ることは少ないので、海洋文化館のリニューアルに関われたことは、非常にうれしいことでした」

—小西さんセレクトの楽曲が聴ける音源コーナーもありますね。

小西「海洋文化館の英語名は、Oceanic Culture Museum です。オセ

—と言われてホットしました(笑)」

—パラオでレコーディングしてくれたミュージシャンが、海洋文化館を見に来られたそうですね。

小西「研究者仲間をよく連れて行くのですが、みんなとても喜んでくれます。ハワード・チャールズはパラオのコミュニティー・カレッジで歴史や文化を教える先生でもあります。その彼が海洋文化館の展示を見て『これは僕が毎日授業で話をしていることだ！学外授業で学生を連れて来たいよ』と。カヌーの展示の前ではカヌーにまつわる教訓のチャントを歌ったり、彼らの中で伝統文化を喚起させる展示なんだと思いました」

—最近はどうな研究をされていますか？

小西「主に、第二次世界大戦まで実質的に日本が統治していたミクロネシアの島々に残る、日本音楽の影響について調査研究をしています。最近では2011(平成23)年から4年間かけてパラオに伝わる日本語混じりの歌を調査し、研究成果として50曲分の譜面をおこなした『UTAHONG(歌本)』と、現地のミュージシャンで研究者のハワード・チャールズが15曲をレ



パンパイプを吹く青年のポーズを実演する小西さん

アニア各地域から代表的な楽曲を2曲選びましたが、これが難しくかった。沖縄の代表曲を2曲ずつくらい選ぶって、ハッキリ言ってムリでしょう(笑)？そこで音源の提供をしてくれた各地域の専門家にも相談しながら、ソースがハッキリしている曲、学術的な調査にも耐えられるレベルの選曲を心がけました」

—コーディングしたCDを作成しました。パラオにはデレベシール(Derebesil)という昭和歌謡みたいなジャンルがあつて、演歌ふうの独特のメロディと日本語混じりの歌詞が人気なんですよ

—研究成果が論文ではなく歌本というのもユニークですね。

小西「今年の4月、天皇皇后両陛下がパラオをご訪問されました。その時、パラオの大統領夫人が両陛下にこの『UTAHONG』を贈呈されたそうです。パラオは親日国として知られていますが、いかに日本を大切にしているか、現在の生活

—メインスクリーンで流れるオリジナルムービーのテーマ曲もプロデュースされましたね。

小西「プロデュースというより、作曲家とのコラボレート作品に近いかもしれません。海洋文化館のテーマソングとも言える曲ですから、オセアニア全体をカバーするような音のつくりでなくては、と考えました。でも、オセアニアを象徴するような楽器や音って、ないんですよ。どこにもないけど、海洋文化館ならではのものではなくてはならない。その上、世界の研究者に聴かせてもおかしくない、学術的なバックグラウンドがしっかりしたものがない。ここはこんな楽器の音色を使ってほしいとか、この部分のリズムはこうしてほしいと譜面を送ったり、細かくやり取りを重ねて、出来上がったのがあの曲なんです。バックグラウンドはフラの基本的なリズム、メロディはメラネシアのメランコリックな雰囲気、短いメロディを繰り返すことでミクロネシアのチャントのイメージを表現して…最終的には、他のどこにもない素晴らしい音楽になりました」

—伝統的な民族音楽だけでなく現代の音楽も含めて、環太平洋の島々の文化を音楽を通して学ぶのは興味深いですね。ここ沖縄で、広く太平洋をテーマにした海洋文化館があることの意義をどう思われますか？

小西「海洋文化館のもう一つのテーマは沖縄です。各地域で暮らす当事者は、身の回りのものだけに目を向けがち。それに対して研究者は鳥瞰的に見えています。遠近の両方から、学術調査にも耐えうる内容になっているのがすごい。装飾品ひとつにしても、単なる民芸品ではなく、現地の有名な作家の作品であったりと価値のあるものが並んでいます。また、戦前、太平洋の島々には、沖縄の人々が大勢暮らしていました。展示のみどころコーナーにオーストラリアのテッド・エガンの『さよならナカムラ』のCDを展示しています。これは実在した沖縄出身の仲村さんとい

—展示ではどんな工夫を？

小西「沖縄国際海洋博覧会当時の展示に、新しいものを取り入れてどう調和を持たせるかが課題でした。一つ工夫をしたのは、触れる・体験するコーナーを重視したこと。コーナーでは、トカゲやエイ、ウミヘビの皮を展示して、実際に触ってもらうことにしました。ウミヘビの皮は京都の職人さんから買ったんですが、沖縄で獲っているウミヘビのこと、オセアニアをテーマにした展示が、グローバルな経済の動きによって支えられていることを実感しました」

—小西さんにとって最も思い出深い展示は何ですか？

小西「ソロモン諸島のパンパイプという管楽器を吹いている等身大の青年のフィギュアがあります。本当に吹いているかのようなボーリング、骨格や筋肉のつき方、皮膚や爪の色まで、リアリティには徹底的にこだわりました。東京のスタジオへ行って、自分で実際にポーズをとって職人さんにリクエストを出したりして。出来上がったフィギュアの写真を研究者仲間が現地の人に見せたところ、『カッコいい』



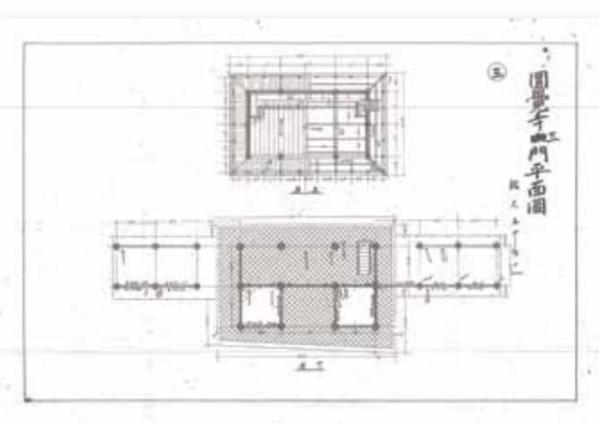
沖縄系ハワイ移民が持ち込んだ三線をリメイクした、珍しいウクレレ。海を渡った文化を物語る貴重な資料として、海洋文化館では写真が展示されている

—う、真珠を取るために出稼ぎに来ていた19歳のダイバーの話です。海で亡くなったんですが、ブルームという町にお墓があつて、現地の人たちは今でもその死を悼み、歌い継いでいる曲なんです。オセアニアと日本、そして沖縄の音楽のつながりを広めることが私の仕事。一人でも多くの人に、太平洋地域と沖縄の深い関係を知ってもらえたらと思います」

文いいうえちず

円覚寺関係図面初公開

2015年4月17日から6月30日まで、南殿新収蔵品展「守れ！琉球の宝」を開催しました。今回、沖縄美ら島財団所蔵の「森政三コレクション」から、琉球王国時代、王家の菩提寺であった「円覚寺関係図面」7枚を初公開しました。図面は、円覚寺の総門、放生橋、三門、鐘楼、方丈、仏殿、開山堂、左脇門、右脇門の9つの建物の平面図で、20分の1、30分の1、50分の1の縮尺で書かれています（鐘楼と方丈、左脇門と右脇門は、1枚に2つの建物がかかれています）。石垣や柱、敷居、羽目板、敷瓦のサイズが、尺貫法やメートル法を用いて、記されています。



◎円覚寺三門平面図



円覚寺総門 1968（昭和43）年復元

1945（昭和20）年まで残っていた円覚寺の全体像や琉球王国時代の建築技術など、貴重な情報が詰まっております。図面はすべて縦53cm×横76cm程の大きな用紙に書かれています。写真は、◎円覚寺三門平面図で、現在、沖縄県教育庁が復元事業を進めています。この図面の上層には「板厚一寸七分」と記載されており、床は約4cmの板の厚さであったことがわかります。また、下層の格子模様の部分には「輓瓦八寸角」という文字が見え、約26cm角の輓瓦が敷き詰められていたようです。これらの平面図は、古写真や発掘調査成果等を合わせると、より正確なデータとなり、復元事業に活用されることが期待されます。

イオンモール沖縄ライカム「ライカムアクアリウム」を監修

2015年4月25日にグランドオープンしたリゾートモール「イオンモール沖縄ライカム」内「ライカムアクアリウム」を沖縄美ら島財団が監修し、維持管理を受託しています。国内商業施設において最大級となる水槽容量100tを超える観賞用大水槽の設置にあたっては、当財団が培ってきた飼育・展示管理技術を集結し、沖縄の海「美ら海」の浅瀬に群生するサンゴ、外洋と繋がる複雑な地形の礁斜面、海底に堆積した白砂などに生息する多種多様な生物たちをこの水槽に再現しました。



水槽の中には、沖縄県内の漁業組合の方々に協力いただき、沖縄県の県魚であるタカサゴや砂地に生息するチンアナゴなどサンゴ礁に生息する生物たちを約30種、1000匹あまりの魚たちを展示しています。この美しい自然豊かな「美ら海」をイオンモール沖縄ライカムに訪れる皆さまに、広く知って頂くとともに、沖縄の海の魅力をより多くの方々知って頂けるよう今後も、魅力ある生物の展示を行ってまいります。



上：「ライカムアクアリウム」全景
下：メガネモチノウオがお迎えします

ラジオ番組「チュラジオ！」放送開始！

沖縄美ら島財団は、ラジオ番組「チュラジオ！」を、2015年4月3日コミュニティFM放送局「ちゅらハートFMもとぶ」にて開始しました。地元の情報発信・収集の場として本部町民に親しまれているFM放送局を活用し、当財団の事業や取り組みなどを分かりやすく紹介していきます。

主な放送内容は、美ら島研究センターや当財団が管理・運営する各公園・施設のイベント案内、サービスマン情報、お客様に利用して頂けるピックアップの紹介をすると共に、長年の研究活動を通して得た沖縄の自然・歴史・文化に関する話などを紹介しています。

加えて、さまざまな部署の職員が出演し、担当業務の紹介や、仕事への思いなどを交えながらトークすることで、より身近に感じて頂ければと思います。

ラジオの電波に乗せて「美らなる島の輝きを御万人へ！」放送は、「ちゅらハートFMもとぶ」(79.2MHz)にて毎週金曜日の昼12時30分～13時00分。また、インターネット放送サービス「USTREAM」では最新回のほか過去の回もお楽しみいただけます。



FMもとぶQRコード
http://www.motob.net



今夏開校予定施設名称決定!!

沖縄美ら島財団は、2012年7月旧名護市立嘉陽小学校の跡地利用はウミガメを中心とした海洋生物等の研究施設が望ましいという名護市の決定を踏まえ、名護市との賃貸借契約に基づき、準備を進めてきました。

施設の新名称は「美ら島自然学校」に決まり、いよいよ2015年の夏、開校予定です。

開校後は、名護市東海岸における亜熱帯性動植物に関する調査研究や普及啓発事業の拠点として活動します。今後の情報にご注目ください。



開校整備中の旧校舎

編集後記

今号で第36号。(一)財 沖縄美ら島財団(旧・財 海洋博覧会記念公園管理財団)広報誌「南ぬ風」も10年目を迎えました。そして、節目を記念(?)して編集後記がスタートしました。

今号は、私たち編集事務局が、取材に応じてくださった方々、資料提供等協力してくださった方々、現場のスタッフ、制作の方々のお力添えを頂き、毎号発行できているというのを改めて感じさせられた号でした。

今号も、沖縄の豊かな自然・歴史・文化：様々な「宝」を守り、育み、より多くの人々へ、そして未来へとつないでいけるよう想いをこめて「南ぬ風」を皆さまのもとへお届けしていきます。と思っています。

(編集事務局 M.K)

新役員紹介

【常務理事】
川満 誠一

1984年3月、琉球大学法文学部法政学科を卒業したのち、1984年4月、沖縄県庁に入庁。2015年4月、常務理事に就任。



理事長	花城 良廣 (はなしる よしひろ)
常務理事	川満 誠一 (かわみつ せいいち) 井口 義也 (いぐち よしや)
理事	襲田 正徳 (おそだ まさのり) 松本 守 (まつもと まもる) 荒井 一利 (あらい かずとし) 浦崎 唯昭 (うらさき いしろう) 高良 文雄 (たから ふみお) 久高 将光 (くだか まさみつ) 与那覇 恵子 (よなは けいこ)

監事	譜久山 當則 (ふくやま まさのり) 金城 棟啓 (きんじょう とうけい)
----	--